藤堂文藝

藤堂文藝

昭和四十三年二月二十日　印刷
昭和四十三年三月一日　発行

藤楓文芸【非売品】

編者　財団法人　藤楓協会
発行者　財団法人　藤楓協会
東京都千代田区内幸町一―三―五
新栄ビル　三階
電話東京（五〇一）一二三九（代表）

制作　有限会社　教文堂グラフィック

印刷・有限会社　教文堂
製本・有限会社　真光社

藤楓文芸の創刊にあたって

財団法人　藤楓協会理事長　聖　成　稔

およそ人としてこの世に生をうけて何よりも幸福であることは健康に恵れることにあるのはいうまでもない。

数多い病気の中にあってらいにかかった人ほどお気の毒な方はない。

自らの不注意でもなく思いがけなくらい菌の感染をうけて発病し学業、職業をすて、肉親とも離別し、しかも生れ故郷を遠く離れて療養所に二十年、三十年さらにそれ以上の長期にわたり療養生活を送らざるを得ない運命をたどられた方々の不幸に私はいつも心からの同情を禁じえないのである。

しかし、一度療養所を訪れてこの方々にお会いした人は必ずや意外に元気で明るいしかも旺盛

な生活意慾に燃えておられる姿に接し、一驚されるに相違ない。

発病当初はその不幸な運命のために、悲嘆に明け暮れ懊悩の日々を長きにわたって送られたことは想像に難くない。しかしその不幸のどん底からやがて力強く生きる道を悟られ起上った結果がこの様な姿になって現れていると思うとき、私は療友の人々に心から頭の下る思いがするのである。

つれづれの療養生活において人々はその才能や特技を生かされ或は書道絵画等に精進され或は詩歌俳句等に興ぜられ、今やいわゆる素人の域を脱せられた方々も決して少くない有様である。

全国の療養所において黙々としてその様な日々を送りつつ創作された優秀な作品を広く世に紹介してらいを正しく理解していただくためのよすがとする一方、療養者と社会との交流の一助となすことこそ藤楓協会の大切な使命と思うのである。

昭和四十二年以来毎年三越の非常な御協力をいただいて、書道、絵画、写真、盆栽、手芸品、工作品の展示会を開催し療友はもちろん、一般参観者の方々の深い御賛同をいただいているのであるが本年はさらに詩、短歌、俳句、川柳等の文芸作品を広く全療養所の同好の人々から募集しそれぞれわが国最高権威の方々にお願いして選をしていただきこの藤楓文芸を発刊することとし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たのである。

一人でも多くの方々に愛読していただき、この文芸作品を通じて療養所の皆さんの生活を偲んでいただくと共にらいについての正しい知識を得ていただくことが出来れば幸である。

川柳の選者川上三太郎先生は昨年暮、この作品の選をおえられた直後、急逝された。

謹んで先生の御冥福をお祈り申し上げる次第である。

なお巻末に記載したらいを正しく理解するためにを是非御一読下さるよう御願いして創刊のご挨拶とする。

療養文芸作品募集要領

○目　的

入所者の作品を通じて、療養生活のさまざまの姿を社会に伝え、らいに対する正しい認識を訴え、入所者と一般社会との心の交流を一層緊密にすることを目的とします。

○募集文芸作品の種類

「詩」　「短歌」　「俳句」　「川柳」　（各雑詠）

○応募作品の選者

詩　村野四郎氏

短歌　木俣　修氏

俳句　加藤楸邨氏

川柳　川上三太郎氏

右の方々に御依頼して御承諾を得て決定し、なお、詩、短歌、俳句の選者は入江侍従次長の御斜旋により、又川柳に就いては朝日新聞厚生文化事業団の御斜旋によるものであります。

○掲載する作品

右の各選者によって応募作品を選考し、優秀なるものを掲載することといたします。

○応募の方法

詩は一人一篇、短歌、俳句、川柳は一人五首又は五句までとし、未発表のものであること。

○応募の書式

一、所属療養所名

二、氏　名（ふりがなを附すること）雅号を書き添えても構いません。

三、年　齢

四、文字は必ず楷書にてはっきり書くこと。

○送付方法及び送付先

応募作品は各療養所に於いて、各種目別（詩、短歌、俳句、川柳別）にとりまとめ、一括して藤楓協会宛に送付すること。

藤楓文芸　目次

序　財団法人藤楓協会理事長　聖成　稔……一

療養文芸募集要領……四

詩　村野四郎選……九

短歌　木俣　修選……三九

俳句　加藤楸邨選……九三

川柳　川上三太郎選……二三九

藤楓協会とは……一六四

らいを正しく理解するために……一六六

らい療養所所在地及び在所者数……一七〇

題字　倉永　圓清

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

詩

村野四郎選

あなたよ　こんな夜は

〈長　島〉　近　藤　宏　一

闇の中で
電話のベルが鳴りひびく
さわさわと雪の降る音もしていて
色褪せた季節の窓枠がふるえている

あなたよ
こんな夜は自分の掌をみつめてはいけない
自分の疲れを確めたりしてはいけない

こんな夜は
どこかで実を結ぶことなくしぼんでいった
花々のこころが疼くのだ
さわさわと雪の降る渚で
白い貝殻は骨の触れ合うようなつぶやきをもらすのだ

皮膚の細胞から
大風子注射のねばっこい油の匂いを
にじませていたあの日の女達よ……
濁った眼をして
いつも顔をこわばらせていた男達よ……

ああそれは
忘れられない長い物語の中の先輩たち

あなたよ
報いられなかった痛みを抱きしめ
今夜は静かに眠るがよい
僕達の寒くて遠い夜明は
深い深い眠りの中で迎えるがよい

闇の中で
電話のベルが鳴りひびく
さわさわと雪の降る音もしていて
色褪せた季節の窓枠がふるえている

偽　名

〈長　島〉島　洋　介

私の本名は　誰も知らない
だから誰も私を呼んでくれる者はない
私は寂しくなると　私を呼んでみる
真暗な海にむかって

砂上の足跡を　波が消し去るように
あの日から消えてしまった私の足跡
もうあなたたちの
深い記憶の底に沈んでしまった……小さな
できごと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c